

DXで妊婦円滑搬送

群大と県内病院

緊急時の患者状態 電子化し情報共有

緊急の対応が必要な妊婦の転院、処置を円滑に行うため、群馬大は患者の情報をデータで送信する仕組み「iPicss（アイピクス）」を県内医療機関に導入した。紙のやりとりが中心だった情報共有を電子化して迅速に症状を伝え、患者の到着前に手術などの態勢を整えられるようにした。既に14施設で運用を開始、2026年度までに分娩機能のある県内全ての医療機関に広げる方針。

と一緒に救急車で運ぶ。このため、これまで受け入れ側は、患者と紙の到着後に手術などの準備に取りかかっていた。

アイピクス用の母体情報シートは情報提供書を簡略にしたもので、1分程度で書くことができる。アプリでは補足情報の入力が可能

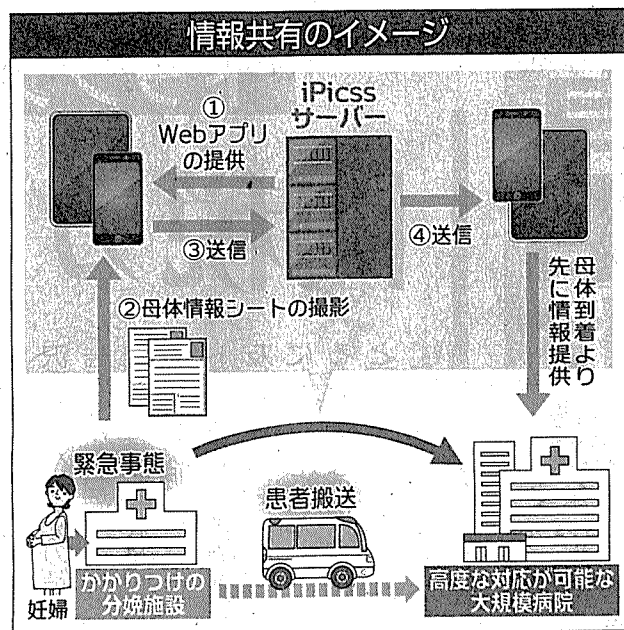
なほか、動画も共有できる。既に導入したのは県立小児医療センター（渋川）や群馬大医学部付属病院（前橋）など。群馬大は「周産期医療施設の減少で今後さらに搬送時間が長くなってしまう懸念がある。医療DXを進め、母児にとって安全安心な医療を提供していく」とした。

着から出産までの時間が、20分50秒から13分30秒に短縮されたというデータがある。周産期医療を巡っては、妊婦の年齢が上がったことなどによる高リスクの出産が増える一方、全国的に分娩施設は減少している。県内では14年度に39施設だったが、24年9月時点で28施設にまで減った。その影響で、搬送時間の短縮も大きな課題になっている。

（小山大輔）

群馬大によると、アイピクスは電子端末向けの医療専用アプリ。かかりつけ医などの搬送元が、緊急時に手書きした「母体情報シート」を端末で撮影し、写真をクラウド上で共有する。受け入れ側の医療機関は到着前に患者の状態を確認す

ることで、迅速な対応が可能になる。この仕組みを使えば、小児科や麻酔科といった関係各科との連携もスムーズになるという。県医療課によると、緊急搬送時に一般的に使われている「母体搬送情報提供書」は複写式の手書きで、患者



アイピクスは岡山大が17年に完成させた。19年5月から岡山県内の全ての周産期施設で運用されている。同県内の事例では、患者到

本県医療機関への導入に当たり、県は24年度当初予算で1000万円の補助金を計上。25年度も関係費用を確保している。